

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	放課後等デイサービス LEIF仁川		
○保護者評価実施期間	2026年 1月 23日 (金)		～ 2026年 2月 2日 (月)
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	46名	(回答者数) 46名
○従業者評価実施期間	2026年1月26日 (月)		～ 2026年2月9日 (月)
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5名	(回答者数) 5名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年2月16日 (月)		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	雨天や気候に左右されない運動療育の提供	雨天や気候の影響を受けずに質の高い運動療育を継続的に提供できるよう、工夫を凝らしている。具体的には、室内芝生スペースを導入・活用することで、お子様方の一日の療育に対する満足度や充実感を高めることに繋がっている。また、この室内環境を最大限に活かすため、利用状況に応じた計画的なスケジュールリングが徹底できている	運動療育のさらなる充実に向けて、室内芝生スペースを最大限に活用し、感覚統合遊びやテーマ別活動の導入によるプログラムの質の向上、プロジェクションやレイアウト変更による非日常的で刺激的な環境の整備を図るとともに、動画を活用した職員間フィードバックの徹底、保護者への積極的な情報発信、およびお子様目線での満足度評価を通じて、継続的な療育効果の最大化を目指していく
2	保護者様への情報共有(支援内容・療育時の様子・体調・怪我など)スピード	保護者様への迅速な情報共有(支援内容、療育時の様子、体調、怪我など)を徹底している。そのために、送迎前に指導員間で細部にわたる情報共有を完了させており、お迎え時に直接、きめ細やかな情報をお伝えすることが可能。直接引き渡し難しい場合にも、LINE等を活用して療育時の様子をスピード感をもって確実に共有できている	保護者様への情報共有をさらに充実させるため、成長の視点や動画を活用した報告による情報の質の深化を推進し、引き継ぎ、職員間連携の標準化を徹底していく
3	お子様一人ひとりに合った視覚支援を活用した支援の実践	お子様一人ひとりの発達特性に合わせた視覚支援を、職員間での共通理解と継続的な見直しのもと実践することで、質の高い支援とお子様の主体性向上を実現している。その結果、お子様の目的意識が明確となり、意欲(モチベーション)が高まり、好ましい言動、良い行動の増加にも繋がっている	専門性の深化、データに基づく効果測定の仕組み確立、および地域生活での活用を見据えた視覚支援の応用範囲拡大を図る

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	マニュアル等を保護者様へ明確な提示・共有が必要	指導員の人数配置や事業所内の様子、各種訓練や研修といった基盤となる体制は整っているが、その取り組みや内容を保護者様へより明確かつ分かりやすくお伝えするための情報共有の質と透明性について、さらなる向上が課題	情報共有の質と透明性を高めるためには、指導体制や訓練・研修内容の明確な可視化に加え、アプリやハンドブックなどの伝達手段の最適化を図り、さらに保護者様からの意見を反映させる双方向のコミュニケーション強化への取り組みを目指していく
2	支援の効果検証と、それを基にした柔軟なアプローチの試行サイクル(トライアンドエラー)の強化が必要	支援実施後の振り返りは定着しているが、その結果を基にした継続・変更といった次なる行動への意思決定に時間を要している。より迅速で柔軟な支援の最適化プロセス(試行錯誤のサイクル)への加速が現在の課題	客観的な効果検証基準(評価指標)の設定と共有、および具体的な行動記録に基づいた議論を徹底することで、ネクストアクションの期限決定と具体的な改善案の提案を必須とし、計画的な試行錯誤のサイクルを行っていく
3	男性スタッフの配置が必要	女性スタッフを中心とした体制となっており、きめ細やかな視点と、利用者様に寄り添う丁寧なサポート体制が強みとして確立されている一方で、利用者様の多様なニーズへの対応力を一層強化していくこと、また、より幅広いロールモデルをご提示していくという観点から、スタッフのジェンダー構成における多様性の確保が今後のサービス向上に向けた、重要なステップの一つだと捉えている	今後は、サービス提供における多角的な視点を確立し、サービスの質をさらに高めるため、男性スタッフの採用を積極的に進め、組織構成の適正化を目指していく